

「舞踏」の草創期に関する研究 —土方巽『禁色』から『肉体の叛乱』までを中心に—

お茶の水女子大学大学院 三枝 彩

研究目的・方法：舞踏は60年代土方巽が創始した前衛舞踊で、70年代にはその影響下の舞踊家達の個々の活動へ拡大、80年以降彼らの海外公演を通じBUTOHの名で世界的に認知された。その発生はデビュー作'59『禁色』とされるが、以後大野一雄らと共に既成の舞踊とは一線を画し暗黒舞踏の語を用い、美術・文学等他分野との交流による実験的な活動を展開する。その活動が舞踏の名で広く知られるようになるのは、大反響のあった土方独舞公演'68『土方巽と日本人—肉体の叛乱』後であった。そこで『肉体の叛乱』に至るまでの60年代の活動の軌跡を、土方巽記念資料館作成による主要・参考文献とその他加えられる文献資料を基に考察し、その交流の軌跡を中心に「舞踏」の草創期を明らかにすることを目的とする。

(1) 『禁色』以前('54-'59)：『禁色』への前段階として、①戦後経済成長と価値観の激変の時代性②「反芸術」の美術家群との個人的交流③武智鉄二のヌード舞踊実験劇'57『ミュージックコンクレート・娘道成寺』に裸体の坊主姿で出演④'58劇団人間座・現代舞台芸術協会合同公演で幼少に親しむ鶏を模す創作をする⑤身体的資質に硬さ、ジャズ的・土俗的な、足腰の粘り・瞬発力を持つ：以上より実験・総合的芸術への志向、動物性、裸体によるエロティシズムへの執着、自身の体への洞察が『禁色』へつながる。

(2) DANCE EXPERIENCE期('59-'62)：6人の前衛家の「65DANCE EXPERIENCEの会」を始めに計4回の自主公演。この期の特色は①三島由紀夫・渋澤龍彦・瀧口修造他シュールレアリスム系の詩人等の支持と異端文学の題材を得る②細江英公の被写体や実験映画に出演、身体動作の断絶の手法のヒントとなる③舞踊への逆介入を狙う可動の舞台背景、チューブ・石膏ギブスの衣装等オブジェとダンサーとの交感をはかられる④前衛音楽・美術との即興をはじめ：土方はダンサーをく素材とし、く素材の過去を含める日常の体験から生を抑圧する行為を抽出することを、く肉体へメタモルフォーズさせるとし、観客とダンサーが共にく肉体を通して生の実在感を体験することをく体験舞踊と呼ぶ。文学者等の支持を得た理由は、異端文学を題材に痙攣、裸体での筋肉の顯示などの身体動作の断絶や造形的な強調により、逆に男性性の抑圧からのエロティシズムや生命感を表し人間の普遍性を具体的に現したからだと考察する。だが'60『聖侯爵』の失敗から美

術家や音楽家との共同パフォーマンスに傾倒する。(3) 暗黒舞踏派活動期('63-'66)：自主公演は'63にグループ名「暗黒舞踏派」の語を冠し計3回。前衛美術家群との共同作業による滑稽かつ暴力的なハプニングを展開。①題材は少年期の身近な記憶のコラージュへと転換、都市と地方化の断絶が進む60年代に西洋の抽象美と日本的郷愁が混合した空間を創る②「反芸術」の動向が'64読売アンデパンダン展の中止を境に周辺へ拡散した流れを受ける③「暗黒舞踏」の「暗黒」は肉体に内在する危機や不安の情緒、「舞踏」は踏むことによる調和や躍動を拒否した土への拘泥、と周囲で意味づけされていく④肉体・オブジェの時空間は唐十郎等の小劇場演劇に影響：土方は発作的情動を起こすことをく錯乱とし、く鑄型の歩行)やく受難体)等の死を暗示する造形へ至る過程の手法として確認される。次第にオブジェへの肉体の埋没や即興のマンネリに陥り、今一度自身の個人的な体験に戻るため土方はソロ活動へ転換する。一方メンバーも独立、舞踏は個人的な体験から白塗りの無記名性に象徴される普遍的な肉体表現へとメタモルフォーズすることだと自覚される。(4) ソロ活動期('67-'68)：各舞踏家公演の演出・一部ソロ出演が続いた後、独舞の'68『肉体の叛乱』舞踏公演。①65年細江英公と「鎌鼬」写真撮影のため上京以来初めて秋田に帰郷、自身の肉体そのものを見なおすきっかけとなる②儀式的空間③種村季弘のマニフェスト「肉体の叛乱」と写真集「鎌鼬」の影響から公演が近代的西欧への決別と前近代的な土俗の肉体表現と解釈される④世界同時代的に学生運動に象徴される人間疎外からの回復と狂気の復権の文脈があった：断食による裸体美、即興の激しい踊り、造形的強調、鶏を絞め殺すなどこれまで培った手法を自らの発作的な情動により消化し、何より天井への吊り上げがく受難体)を実際に提示しく舞踏)は個の肉体に根付いた表現であるという意味を決定付けた。結び：土方が周囲との交流の中、肉体の固有性と普遍性の両方を舞台表現として追求していったことがわかる。また舞踏が既成の舞踊への反抗というよりも戦後の舞踊界の時代表現で土方が舞踊の枠組を拡大したと考えられる。特に美術・音楽との共同作業には総合芸術的な非日常の時空間への志向と体験に根ざした日常の時空間への執着が見られる。『禁色』以降、様々な交流により舞踊の枠組を拡大し、『肉体の叛乱』で固有と普遍、非日常と日常を兼ね備えた一個の肉体表現により観客を震撼させたといえる。(主要参考文献：土方巽記念資料館編「土方巽年譜」鶴岡善久編「主要・参考文献リスト」(1993「土方巽舞踏大鑑」悠思社PP.160-166)、土方巽全集1998河出書房、千葉成夫1986「現代美術逸史」晶文社)